

Contents

- 第Ⅳ期メンバーでの活動がスタートしました。
- TA FD 研修会を各キャンパスで実施しました。
- 全国私立大学 FD 連携フォーラムに加盟しました。

～学長・センター長メッセージ～

- 「大学教員としての教育能力のあり方について」…………… p. 1
- 「第Ⅳ期（平成 25-26 年度）の活動に向けて」…………… p. 1

～全学 新入生アンケート結果報告～

- 学生の主体的な学びへの課題～FDの観点から～…………… p. 2

～全学 FD 研修会報告～

- 平成 25 年度 TA（ティーチング・アシスタント）FD 研修会…………… p. 4
- 平成 25 年度新任教員 FD 研修会…………… p. 5
- Propell Teacher Workshop for the TOEIC Speaking and Writing Tests：TOEIC 指導者向けワークショップ…………… p. 6

～FD 活動紹介～

- 各学部・研究科における FD 活動
＜文学部＞＜経済学部＞＜生命科学部＞＜食環境科学部＞…………… p. 7
- 学外 FD 関連研修会参加レポート…………… p. 9
- 2013 年度学生 FD スタッフの活動・取り組みについて…………… p. 10
- バリアフリー推進室～障がい学生支援～…………… p. 10
- 教員の取組 Pick Up ＜法学部 Friday English Lunch＞…………… p. 11
- 他大学との交流「関東圏 FD 連絡会」…………… p. 11
- 全国私立大学 FD 連携フォーラム加盟について…………… p. 11

～FD 推進支援室からのお知らせ～

- 東洋大学 FD 推進センター活動状況報告…………… p. 12
- 平成 25 年度 FD 推進センター組織…………… p. 12

「大学教員としての教育能力のあり方について」

学長 竹村 牧男

今日の大学は、研究力の維持・向上はもちろん、むしろ教育力の適切な拡充・深化にあると言ってもよい。広範な層をなす学生全員の成長を支援していくためにも、日頃の教育活動を真摯に点検し、高めていくことが求められている。では、教育活動の改善には、どのようなことがポイントとなるのであろうか。

それには、カリキュラムとシラバスの不断の点検が必要である。学科・専攻として、シラバスは毎年のように点検可能であり、カリキュラムも大幅な改訂は 4 年に 1 度であれ、運用上の改善は年々可能なはずである。

次に実際の現場での授業方法が問題となる。特に本学は「哲学教育」を標榜しており、それにはあらゆる授業において、物事の本質を深く掘り下げて考える訓練を展開していくことが重要である。そのためにも、「学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要」である。その方法論の具体的な例等については、たとえば平成 24 年 8 月の中教審答申を参照することが便宜であろう。

さらに、そうした授業方法改善への努力の根底に必要なことは、教員の教育職としての深い自覚である。たとえば、カリフォルニア大学の教員採用基準は、以下のようなものであるという。「①専

門科目に対する能力を十全に備えていること。②専攻分野において、弛まぬ進歩を遂げていること。③授業のための教材を組織化し、これを分かりやすく提示する能力をもっていること。④授業の主題と他の分野との関連性を学生に分らせる能力を持っていること。⑤学習・教授課程

において、学生の意欲をかき立てるとともに、教師も情熱を持っていること。⑥入門段階の学生には好奇心を起こさせ、より進んだ学生には創造的な勉学を促す能力を持っていること。⑦学生に対するガイダンスや助言活動に熱心に関わっていること。」

以上はおそらく、今後の大学教員に求められる資質・能力として、標準的なものとなっていくことと思われる。根本に学生の育成へのあふれる情熱が据えられている。同時に専門性を広い視野で語りうる能力が求められている。我々もこの例を参考に、教育者としてのプロフェッショナル・ディベロップメントに努めたいものである。



第Ⅳ期（平成 25-26 年度）の活動に向けて

センター長・副学長 神田 雄一

本学の FD 活動も第Ⅳ期を迎えて充実した FD 活動が展開されております。今期も教職員が教育について語り合う”場”としての FD として、教育の質保証と向上に向けて各教育段階や分野に応じた独自の FD 活動の推進を目指したいと考えております。FD 推進委員会では 5 部会を中心に活動を展開してまいります。従

来の授業改善対策部会を教育改善対策部会と改称し、学習指導や教育改善に向けた取り組みに注力していきます。今年度末には関東地区で初の「学生 FD サミット 2014 春」が本学で開催されますので当委員会もサポートをいたします。今期も引き続き教職員の皆様のご理解と積極的な参加をお願いいたします。

全学 新入生アンケート結果報告

学生の主体的な学びへの課題 ～FDの観点から～

昨年度に引き続き、本学では2回目となる全学統一の新入生アンケートを実施いたしました。アンケートは5月7日から5月25日までの期間で、学内情報システムの「ToyoNet-ACE」にて実施し、全新生の49.2%にあたる3,535名から回答いただきました。

アンケートの趣旨は、新入生に、本学入学の契機や理由および入学後約1ヶ月間を経て、大学の授業・学生生活など、大学についてどのように感じているか、どのようなことを求めているかなどを調査することを目的としています。

設問は、選択式・記述式を合わせ17問設定しましたが、今回はその中でも特にFDに関係する内容を抜粋して報告いたします。

新入生アンケートの設問項目

1. 本学に入学するきっかけについてお聞きします。

- (1) 何を通じて、東洋大学および入学した学部・学科を知りましたか。
- (2) いつ頃、東洋大学および入学した学部・学科の受験を意識し出しましたか。
- (3) 東洋大学および所属学部・学科を志望したのはなぜですか。
- (4) 本学の志望順位は何位でしたか。
- (5) 本学への入学をどのように決定したか、お答えください。
- (6) 高校時代は、どのようなことに力を入れて取り組んできましたか。
- (7) 高校3年次、授業以外の、1日あたりの学習時間はどのくらいでしたか。

2. 現在と今後のことをお聞きします。

- (8) 大学の「建学の理念」を知り、共感できましたか。
- (9) 所属学部・学科の教育目標を知り、理解できましたか。
- (10) 履修登録に際し、4年間で授業科目をどのように体系化して履修していくかをイメージできましたか。
- (11) 大学生活で特に力を入れて取り組みたいことは何ですか。
- (12) 自分の将来のために、4年間でどのような力を身に付けたいですか。
- (13) 現在、授業への出席率はどのくらいですか。
- (14) 現在、授業以外の、1日あたりの学習時間はどのくらいですか。
- (15) 大学に対して、もっと充実してほしいと感じることは何ですか。
 - 15-1. 授業について
 - 15-2. 学習支援について
 - 15-3. 学生生活について
- (16) 今後、不安なことはありますか。
- (17) 上記のほかに、東洋大学をよりよくするためのご意見・ご要望があれば教えてください。

1. 学習時間の減少の要因について

授業以外の1日の学習時間について、「高校3年次」と「現在」の推移を調査した結果、「4時間より多い」が33%→1%、「3～4時間」が20%→3%、「2～3時間」が17%→10%、「1～2時間」が14%→30%、「1時間未満」が10%→40%、「していない」が5%→15%と、大学生になってからの学習時間が全般的に激減しています。これは、昨年度も同様の結果となっており、依然として新入生の入学後の授業時間外の学習が定着していないことが窺えます。この要因として、学生が①予習・復習を行わなくても単位を修得できる状況であること、②授業を受けることによって学びたいという知的欲求が生じていないこと、③授業で理解できなかったところを確認せず、そのままにしていること等が考えられます。実際、①については「設問(15) 15-1. 授業について」の自由記述において、「授業内容のレベルアップ」、「ハイレベルな授業」など、現状よりもレベルの高い授業を望む声が寄せられています。②についても、「授業がありきたりすぎてつまらない。もう少し踏み込んだ内容を」「講義をきちんとやってほしい」「普段の授業をしっかりとしてほしい」などの意見もあり、学生の学びを促す授業が求められていると言えます。③については、「もっとわかりやすい授業」、「わかりやすい授業を望む」、「英語の授業がわかりづらい」など、授業において十分な理解を得られていない学生がいることが窺えます。

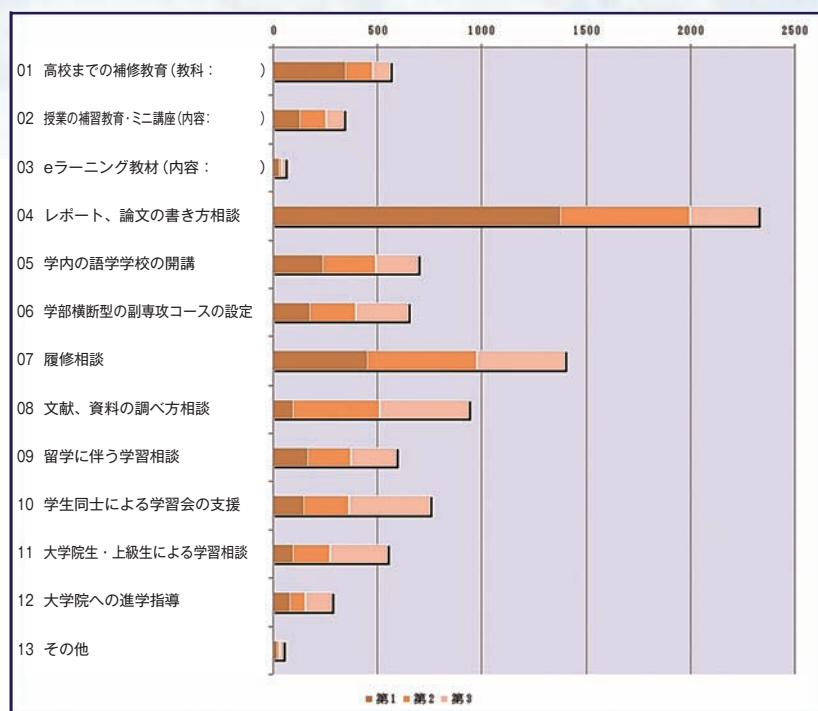
上記の意見・要望への対応策として、学長から各学部長に周知している「平成26年度の教育課程編成にあたって」では、ブレンディッドラーニング（正課授業とToyoNet-ACEを効果的に組み合わせる）など能動的な学修を促す仕組みの導入やシラバス（授業計画）の充実、オフィスアワーの積極的な活用、学習支援室におけるサポート体制の整備などを推奨しています。学生の学ぶ意欲を引き出し、主体的な学びへと導く体制を構築していくことは、学部・大学として喫緊の課題であると言えます。あわせて、学生の授業の満足度向上

が主体的な学びと密接に結びついていることは言うまでもなく、教員の授業改善への取組も上記の意見・要望に対する大きな対策であると思われます。

また、「平成26年度学校法人東洋大学予算編成方針」においても、「学士力の高揚」が主要な課題とされ、その中で「学習支援体制の確立整備」が挙げられており、学生からの要望だけでなく、東洋大学としても早急な対応が求められているところです。

2. 学習支援に対する要望について

「設問(15) 15-2. 学習支援について」では、「レポート、論文の書き方相談」(2,329人)が最も多く、次いで「履修相談」(1,401名)、「文献、資料の調べ方相談」(941名)という結果となりました。「レポート、論文の書き方相談」「文献、資料の調べ方相談」については、既に授業として開設している学部や、学習支援室において対応して



(15) 大学に対して、もっと充実してほしいと感じることは何ですか。
15-2. 学習支援について (優先順位の上位3位)

いる学部・キャンパスもありますが、学生へのフォローはまだ不十分であることが窺えます。これらについては、全学的な支援の場の設定は勿論、各学部においても独自の教材の開発や相談の場の設定、また、教員のオフィスアワーの活用や授業の中で説明する時間を設けるなど、大学・学部・教員それぞれのレベルで取り組むべきことがあるように思われます。

4年間を通した体系的な学習イメージについては、「設問(10)」において、794名(22%)の学生が「イメージすることができなかった」と回答しました。イメージすることができなかった理由(自由記述)としては、「ガイダンスでの説明不足」、「ガイダンスのときに説明のスピードが速すぎたから」、「先輩や先生に相談する機会が欲しかったです」などガイダンスの内容等が不十分であるとの意見や、「シラバスだけでは授業内容を十分に知ることができない」「教科ごとにどのような内容を学習していくのかが分かりにくかった」など個々の科目に対する説明の改善を求める声、さらには「どのように次の授業へつながっていくのかが分からなかった」「4年間の授業の取り方の例がなかったこと」「たくさん履修科目があり迷うところがあった」など、授業科目の体系化が不明瞭であることへの意見も多く寄せられました。また、「自分の将来の目標が決まっていないから」「これからやりたいことがまだ曖昧だから」「具体的にどのようなことを重点として学びたいか、はっきりとしていないため」など、学習への動機付けが曖昧な学生も多く見られます。

学生が充実した学生生活を送っていくためには、新入生ガイダンスなどの単発の取組のみではなく、シラ

バス(授業計画)や履修要覧のさらなる充実、フレッシュキャンプや導入教育の実施など、一定の期間をかけた継続した取組により、目的意識が希薄な学生に対して、一体感や帰属意識、大学生活の目標等を持たせることでモチベーションを向上させることも重要な取組であると思われます。

まとめ

本アンケートの結果は、7月19日(金)の学部長会議において、全学としての報告を行うとともに、8月上旬に、学部・学科ごとのデータを各学部教務担当課に配布しております。上記の内容も、個別に見ますと、学部・キャンパス等でそれぞれ異なった傾向が出ている部分もありますので、是非、学部・学科のFD活動や、授業その他の改善にご活用ください。

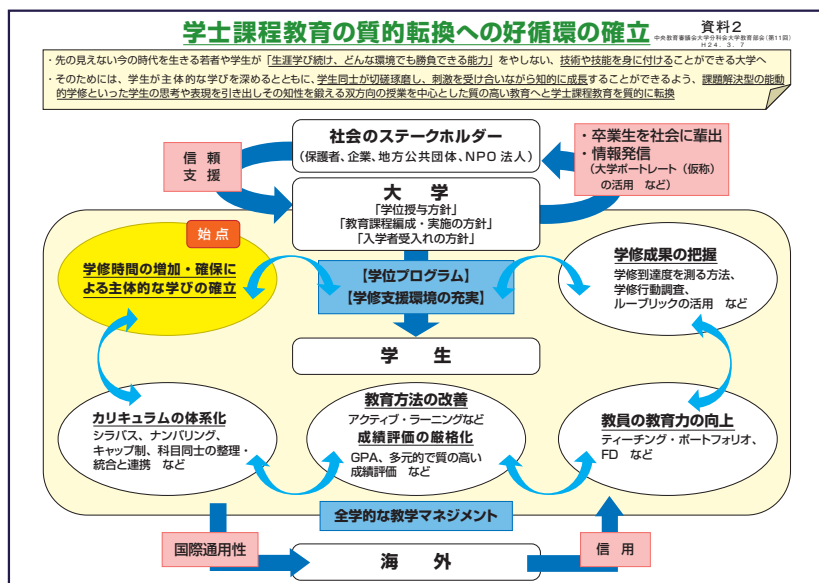
また、本アンケートは卒業時アンケートとともに次年度以降も継続して実施し、経年変化等もお示していく予定です。あわせて、これらの結果を各学部・学

科において検証し、改善に繋げていく体制を構築することにより、学士課程教育の質的な充実と学生の満足度向上の一助となるよう取り組んで参ります。

なお、参考として、中央教育審議会大学分科会大学教育部会「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学へ」(審議まとめ)においても、大学における学修支援環境の充実を目指した各種取組が取り上げられておりますので、ご参照ください。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1319183.htm

(学長室)



<参考>中央教育審議会大学分科会大学教育部会審議まとめ
「予測困難な時代において生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学へ」平成24年3月26日
リーフレットより抜粋

平成 25 年度 TA(ティーチング・アシスタント)FD 研修会

開催日時：平成 25 年 4 月 20 日（土）13:00～15:00
（朝霞キャンパスのみ 10:00～12:00）

会 場：白山キャンパス 5 号館 5207 教室
川越キャンパス 1 号館 1101 教室
板倉キャンパス 2 号館 2101 教室
朝霞キャンパス 講義棟 講 312 教室

Program

1. 開会挨拶
2. TA 制度の概要
3. グループ討論
4. 発表・質疑応答
5. 講評・閉会挨拶

平成25年度における TA(ティーチング・アシスタント)FD研修会の変更点 研修部会長(平成 24 年度)宮原 均

TA 研修会について、平成 25 年度の変更点を報告します。昨年までは、白山キャンパス 1 か所で開催し、講演とグループワークの 2 部構成で行われました。本年度も 2 部構成の点は変わりませんが、① 4 つの各キャンパスそれぞれで実施し、② 参加者に TA ハンドブックの内容を十分に理解させることを目的にしました。この変更には、研修部会における次の指摘が反映されています。a) 他キャンパスから白山への移動が困難なため、TA の出席率が低いこと、b) 理系・文系、更には各学部によりその業務内容がかなり異なり、合同の研修では十分な成果が得られないこと、c) 研修本来の目的を考えると、TA ハンドブックの活用を中心とする実施が有益であること、等です。当日は、各キャンパスに、TA 制度の概要講演及び司会をそれぞれ担当する教員、グループ討論のファシリテーターのシニア TA、そして事務局が実施にあたりました。内容は、TA 制度概要についての講演の後に、グループワークを行いました。択一と論述式からなるシートを各参加者に配布し、TA ハンドブックを参照しつつ解答し、更に疑問点を挙げてもらいました。次に、TA が実際に遭遇し得る事例を示し、これについてグループワークを行い、最後にグループごとに発表しました。

各キャンパスでの実施のため、TA への連絡や資料配布等に若干の反省点がありますが、出席率は前年の 55%から 91%と大幅に改善し、また、業務ごとのグループワークも好評でした。なお、参加対象を新任 TA としましたが、シニア TA、さらには SA にも研修の必要性があるとの議論を受け、前者はファシリテーターとして、後者は 1 キャンパスに限定して実施しました。来年度以降は各キャンパスでの実施に向けて検討していきたいと思います。

白山キャンパス

毎年、白山キャンパスにて実施されてきた TA 研修会を、本年度から各キャンパスで実施することになった。その主な理由は、白山キャンパスと各キャンパスが離れているため出席率が向上しないこと、単なるアルバイトではなく専任教員の補助という役割上研修が必要であること、TA ハンドブックの内容について討論を行うことで周知徹底を図ることなどであった。4 月 20 日（土）、白山キャンパス 5 号館の 2 教室にて、TA 制度の概要についてスライドを用いて説明した後、TA ハンドブックの内容に対応した質問に答えてもらいながら、グループごとに討論・発表・質疑応答が行われた。これまでの研修会は、大教室で、教員による「TA の心構え」や「留意点」などの説明の後、グループ分けをし、経験談や失敗談などを互いに話し合いながら、現状の問題点や課題をグループ代表者に報告してもらい、教員が総括するといったものであった。今回は、経験者であるシニア TA に各グループのファシリテーターをつとめて頂いたことにより、TA ハンドブックの内容と TA の役割について理解がより深まった。また、勤務先のキャンパスでの開催により、参加率が向上したことがメリットであった。

幸田 浩文（経営学部 教授）

川越キャンパス

今年度の TA 研修会はキャンパス毎の開催となり、川越キャンパスでは理工学部と総合情報学部の二学部の TA 活動が主体となった。従って TA の作業内容は、実験や演習が比較的多いのが特徴である。研修会は松元理工学部教授の司会により進められた。最初に FD 推進センター長より TA 制度の概要と、学生諸君の多くが FD に対する理解が乏しいため、FD に関する説明、さらに本学の教育理念などの解説後に TA の役割と TA への期待が述べられた。休憩をはさんで 6 グループに分かれたグループディスカッションが行われた。TA の役割や疑問点として、学生との関係をどう保つか、非協力的な学生への対応、成績への対応、さらに指導方法などに話題が集中した。これらに対してはまず指導教員と

十分にコミュニケーションを取ることが重要であることを共有した。出席者からは、「改めて TA の役割を認識した」、「学んだことを実際の実習に役立てたい」などの意見が寄せられた。課題としては、研修会への事前連絡の方法や資料の配布方法など、次回への改善が求められた。また、大学院生の減少に伴う SA の採用と事前研修のあり方は今後の課題として検討する必要がある。

神田 雄一（理工学部 教授）

板倉キャンパス

4 月 20 日（土）13:00～15:00 に TA（SA）研修会を行った。今回の TA（SA）研修会では、新しい試みとして、(1) 修士課程 2 年生の TA 経験者 5 名がファシリテーター役として参加したことと、(2) SA が参加したことが挙げられる。

TA 経験者がファシリテーター役としてグループディスカッションに参加したことで、短い時間の中でも議論が円滑に進んでいたように見受けられた。また、板倉キャンパスでは学科・学部の増設により、院生のみでは実習の TA が賄いきれないため、今年度は SA を多くお願いすることとなった。実習中は、SA の担当する業務も TA とほぼ同じ内容となり、SA も TA と同様の責務を負うことになる。そのため、今回の TA 研修会には SA も参加してもらうことを急遽決め、実験的に実施した。初めての SA 研修ということもあり、また先輩達に混ざっていたので、SA は緊張気味に見えたが、単なるアルバイトではなく、学生により良い教育環境をもたらすため等の目的や、個人情報取り扱いを含めた注意点を学ぶことができたのではないと思う。今回の TA（SA）研修会への参加者は博士前期課程 30 名、学部生 13 名であった。

藤澤 誠（食環境科学部 准教授）

朝霞キャンパス

当日、TA は 2 名中 1 名の参加。その 1 名にシートへの記載をさせたが、それに基づくグループディスカッションは実施できなかった。白山キャンパスと合同実施、あるいは SA の参加を考慮すべきと考える。

宮原 均（法学部 教授）

平成 25 年度 新任教員 FD 研修会

研修部会長 尾崎 晴男（総合情報学部 教授）

日 時 平成 25 年 7 月 6 日（土）14：30～19：00

場 所 6211 教室（白山キャンパス 6 号館 2 階）

対 象 平成 25 年度新任専任教員

（非常勤講師は自由参加 ※事前申込制）

本年度の新任教員 FD 研修会が、7 月 6 日（土）14:30 から白山キャンパス 6 号館において開催された。本学の教壇に立って 3 カ月が経過した新任の先生方に集まっていただき、授業について率直な意見交換により、その中から新たな知見を見出していくことを目的としている。本学に着任された先生方は、専門分野や年齢、教育歴も幅広いことから、様々な経験をもとに大学全体の FD 活動へと共に貢献していただくことに力点が置かれている。

まず、竹村学長から挨拶をいただき、続いて神田副学長・FD 推進センター長から「東洋大学の FD 活動」と題して講演があった。これを受けた研修会は 3 部構成となっており、第 1 部は、「授業運営の課題と工夫」と題してミニシンポジウムが行なわれた。研修部会のメンバーが、それぞれ進行中の担当授業をケースとして、授業運営上の課題と工夫事例の報告を行い、その後、意見交換を行うことによって、教員の視点から問題の認識と改善の糸口を提起したものであった。それぞれの教員の経験に基づく工夫が語られ、興味深い内容となった。

第 2 部は、東洋大学学生 FD スタッフから「学生が望む、良い授業とは」をテーマに報告がなされた。学生の視点に基づいた授業

に対する期待を、教員も共有しようとしたものである。学生 FD スタッフは、学内での活動はもちろん他大学の学生とも連携しながら、より良い授業の実現に向けて取り組んでおり、その率直な報告は好評であった。

第 3 部では、グループディスカッションが行われた。6 つのグループに分かれ、着任後 3 カ月の経験と第 1・2 部の聴講をもとに、より良い授業を目指して広く知恵を共有するこ



グループディスカッションの様子



グループディスカッション発表の様子

Program

総合司会 尾崎 晴男（総合情報学部教授）

1. 開会挨拶・・・学 長 竹村 牧男（文学部教授）
2. 講演「東洋大学における FD の取組み」
・・・FD 推進センター長 神田 雄一
（副学長・理工学部教授）

3. 研修会

【第 1 部】ミニシンポジウム

「テーマ：授業運営の課題と工夫」

パネリスト：田中 修三（理工学部教授）
和田 尚久（国際地域学部教授）
石井 隆憲（ライフデザイン学部教授）
藤澤 誠（食環境科学部准教授）

【第 2 部】報告

「学生が望む授業改善、よい授業とは」

・・・東洋大学学生 FD スタッフ

【第 3 部】グループディスカッション

「テーマ：プログラム第 1・2 部と、
着任 3 カ月の経験を受けて」

4. 総括・閉会挨拶

副学長 杉山 憲司（教務部長・社会学部教授）

とをねらいとした。所属学部や年齢、教育経験等が多様となるようにグループ分けし、研修部会メンバーもファシリテーターの立場で加わった。それぞれのグループで活発な意見交換がされ、授業への思いを自ら語り、普段はふれあう機会の少ない他学部の教員の話を聞くことで、刺激のある時間となった。ディスカッション後には、あらためて全体集合し、各グループから議論のエッセンスを発表してもらうことで、知見の共有をさらに図ることができた。発表後には、杉山副学長・教務部長から講評と今後の期待が述べられた。

最後に、終了後に行った web アンケートにおいて、「参考になった」との回答が多かったが、研修内容等については、新任教員にとって、より有意義なものとなるよう、さらなる改善・工夫を行っていく必要がある。

また、本学の今後の FD 活動への要望も多く寄せられたため、新任教員 FD 研修会だけでなく、種々のシンポジウム、研修会等の内容に反映させることにより、一層の FD 活動の推進を図っていきたい。

Propell Teacher Workshop for the TOEIC® Speaking and Writing Tests : TOEIC® 指導者向けワークショップ

Date: Thursday, 1 August, 2013 9:30 a.m. – 18:00 p.m.
Location: #8301 (class room in 8th building) Hakusan Campus
Facilitator: Assessment Specialists of the TOEIC® Tests from ETS
Host: Educational Testing Service (ETS) The Institute for International Business Communication (IIBC)

Workshop Schedule

09:30 – 10:15	Welcome and Workshop Objectives
10:15 – 11:00	Tests Overview
11:00 – 11:15	BREAK
11:15 – 12:00	Score Descriptors
12:00 – 12:30	Learning Objectives
12:30 – 13:30	LUNCH (Lunch will be provided for all participants.)
13:30 – 15:00	Speaking Scoring Guides - benchmarks and scoring practice
15:00 – 15:15	BREAK
15:15 – 16:15	Writing Scoring Guides - benchmarks and scoring practice
16:15 – 17:00	Review Activity Books
17:00 – 17:30	Wrap up/Workshop Feedback
17:30 – 18:00	Certificate of Attendance



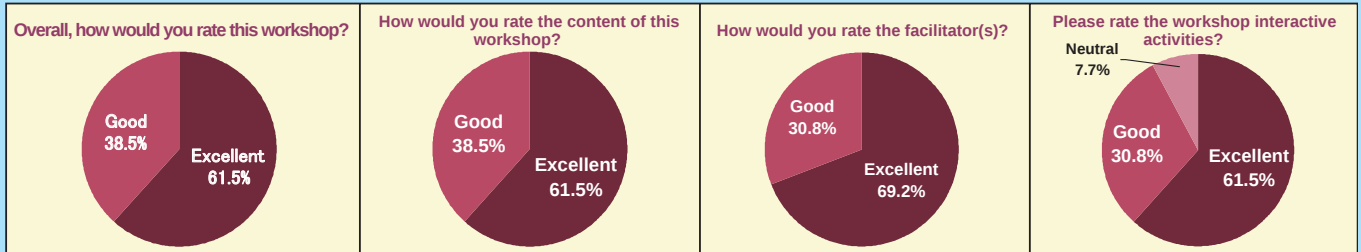
昨年度に引き続き、国際化推進および英語教育に関するFD研修の一環として英語担当教員を対象に、第3回目となるTOEIC指導者向けワークショップを開催しました。

英語教育を通じてグローバル人材を育成する目的のもと、アメリカのETS (Educational Testing Service) より講師を迎え、実践的なアクティビティが行われました。ETSは、TOEICやTOEFLなど約200のテストプログラムを開発している世界最大の非営利テスト開発機関であり、実際に問題作成に携わる講師が来日しま

した。TOEIC試験の概要のみならず、学生の英語コミュニケーション能力の向上に示唆するための指導方法についても学ぶことが出来る貴重な機会となりました。

東洋大学ではグローバル人材の育成に向けた3本の柱のひとつに「国際化」を掲げ、いっそうの国際化推進に向けて、語学留学制度(学内・学外)、試験対策講座、奨学金制度など、多方面にわたって学生が国際的に活躍できる体制を構築しておりますので、教員の皆様もご協力宜しくお願いいたします。

<questionnaire results>



TOEIC ワークショップに参加して

江口 智子 (生命科学部 専任講師)

昨年開催されたTOEIC Listening and Reading Testsのワークショップが有意義だったため、今年のTOEIC Speaking and Writing Testsのワークショップにも参加させていただいた。講師の先生は昨年と違って、やはり親しみやすかった。また、同席した受講生の堪能な英語力や発言力に感心し、刺激を受けた。

ワークショップの中では、TOEIC SW Testsの問題例や解答例をグループで吟味し、採点基準を学んだ。その際、TOEICは「日常生活やビジネスの現場でコミュニケーションをする能力を測るテスト」であることを再確認した。つまり、英語力の他、問題対処能力が重視されているということだ。例えば、スピーキングのテストで、銀行のATMにカードが引き込まれたまま出てこないという顧客との電話応対が課されたとき、英語が流暢であっても、相手の立場を無視した応答はスコアが低くなり、その逆に多少発音や文法に誤りがあったとしても、解決策を適切に伝えた場合は高得点になる、というシステムだ。ライティングのテストにおい

ても同様で、課題にいかにか的確に答えているかが大切であるということを確認した。これは納得のいくもので、大学の英語の授業で課題を評価する際の参考になった。ワークショップでは特に、学習目標 (learning objectives) について話し合ったことが有意義だった。普段の授業でシラバスや教科書をこなすだけでなく、「今日はこれが出来ようになった」という達成感を受講生が味わえるように、もっと意識するべきだと気づいた。このことを今後の授業運営に活かしたいと思う。

ただ、大学での英語教育が実用一辺倒となっていくことに疑問も湧いた。例えば、英米文学のように抽象的で、実践性に直結しないような学問も、長い目で見れば人間性を豊かにしたり、英語力養成という観点からも有効だと思うのだ。ワークショップに参加して、自身の研究分野である英米文学と一般教養課程における英語教育の意義を改めて考えさせられることにもなった。

各学部・研究科におけるFD活動

文学部FD 講習会「大学教員としての教育能力のあり方について」

長谷川 勝久（文学部 教授）

日時：6月19日（水）：14：40－16：10（4時限目）

場所：白山キャンパス6号館2階6216教室

演題：Teacher Education at Montclair State University
: Literacy Instruction and Reflective Practice

講師：Erik Jacobson (Early Childhood, Elementary, and
Literacy Education Montclair State University)

エリック・ジェイコブソン先生が勤務されているモントクレア大学における教員養成の考え方や、目指す教師像、それらを具体化するために行われている授業についてご講演頂いた。特に、「教科分野の全域にわたる言語とリテラシー」という教員になる学生には必修の科目内容についての説明は、ラスコーの洞窟に描かれた絵などを例に挙げ、この絵から、狩



図 当日の様子

りの仕方、どの動物を狙えば良いのか、この動物について知っている者は、同じ洞窟で暮らす仲間であることなど、様々な情報を読み取ることができ、正にそのことがリテラシーであ

るといった内容で、日本ではあまり見かけない授業内容であった。これは、ほんの一例にすぎないが、どの教科においても、そこから様々な情報を読み取ることが大切であり、そのためにはリテラシー教育が重要であるとの内容であった。

生命科学部・食環境科学部講演会「海外の遺伝資源を適切に利用するために」を開催

東端 啓貴（生命科学部 准教授）

生物多様性条約（1993年に発効）の目的の一つに、遺伝資源へのアクセスと利益配分（ABS：Access and Benefit Sharing）がある。これは、遺伝資源へのアクセス及びその利用から生ずる利益を原産国へ一部還元するというものである。ABSに実効性を持たせるために、2010年に採択された名古屋議定書では、利用国が適切な国内措置を講じることを求めており、日本でも国内措置を整備することを目的に、関連団体や関係省庁の間で議論が続けられている。学術研究にも生物多様性条約のアクセスと利益配分のルールが適用されることから、学術研究活動を行っている研究者にこの国際ルールを普及啓発するために、国立遺伝学研究所にABS学術対策チームが設置された。

国家間を跨いで遺伝資源を使用する場合に必要な措置や問題点、国内の法整備における現状などについて、国立遺伝学

研究所ABS学術対策チームの森岡一氏と鈴木睦昭氏にご講演をいただいた。海外の遺伝資源を利用するためには、名古屋議定書に基づき、各国の窓口を通して、研究者自身が相手国と文書を交わさないといけないことから、個々の研究者が名古屋議定書の内容を十分に理解しておく必要があることが分かった（1993年以前に入手した海外の遺伝資源についてはこの範疇でない）。しかしながら、個々の研究者が複数の国を相手にするにはいささか無理があり、学内に専門部署が必要かもしれない。特に、特許が絡む場合は慎重に行う必要がある、学内の特許申請書に「海外の遺伝資源を使っているか」のチェック項目を追加したほうがよいというアドバイスをいただいた。この講演は平成25年6月24日（月）に板倉キャンパス3301教室において行われ、参加者は、教員14名、学生26名の合計40名であった。

経済学部 FD 講演会報告「学生とのより良い関係構築のために」

千明 誠（経済学部 准教授）

経済学部では、7月4日（木）にFD講演会を開催した。今年度は、昨年度の「FD 会合」において学生の変容への対応が話題となったことから、『学生とのより良い関係構築のために』というテーマで学生相談室に講演を依頼した。

講演の前半は、発達障がいのある学生への対応が話題となった。はじめに、本学の学生相談に関して、学生相談室の利用者数は増加傾向にあり、精神衛生に関する相談が約7割を占めている現状が報告された。発達障がいのある学生への支援体制については、本学をはじめ各大学は、支援室の設置を中心として様々な支援を行っている。具体的には、講義の録音や録画の許可、日時や約束事は必ずメモを取らせる（発達障がいのある学生には目からの情報が大切）等のソフト面や、個別学習や情緒安定のための小部屋の確保等のハード面の対応例があげられる。さらに、「打たれ弱さ」や「権利意識」が特徴とされる近年の学生には、叱咤激励するのではなく、

人間性を否定せず問題となった事実や改善点を具体的に伝える（「〇〇すれば、もっと良くなる」）ことが大切である。また、教職員（相談員含む）が連携してチームとして対応することが重要であり、対応の必要性の見極めは、学生本人が困っているか否かがポイントとなることが指摘された。

後半は、二次被害防止の観点から、ハラスメント相談への対応が話題となった。ハラスメントの定義や事例について説明があった後、ハラスメント相談は、カウンセリングとコンサルティングの両方のスキルが必要な点で、一般の教員には対応が難しい。相談を持ちかけられた場合は、同じ目線で一緒に悩み考える真摯な態度とプライバシーの厳守が必要となるが、自分には難しいと感じたら相談窓口への相談（専門家との連携）を本人に勧める必要があることが指摘された。

文学部 FD 講演会「ドイツの教育と文学に関する講演会」

長谷川 勝久（文学部 教授）

日 時：7月10日（水）

場 所：講 演：①② 16:20～17:50

白山キャンパス 6号館 2階 6209 教室

体験授業：③ 18:10～19:00

白山キャンパス 7号館 2階 図画工作室

演題：①「ドイツの職業学校 すべての人々にチャンスを」

②「モモのお話—ものに時あり—自由ヴァルドルフ学校（シュタイナー学校）について」

③シュタイナー学校体験授業（図画工作）

講師：①マティアス・バーテルマン（博士）
中央職業学校フェルクリンゲン教諭

②③ニノン・ケーテ・バーテルマン
（シュタイナースクール ザールブリュッケン教諭）

①ドイツでは、小学校4年間を終えると、ハウプトシューレ、実科学校、ギムナジウムの3つのいずれかに進学することになる。その後、概ね職業専門学校、職業学校、大学と進学する仕組みになっているが、これらの中の職業学校と産・官・学が一体となって行われる職業教育システムの一つであるデュアルシステムについて詳しく説明があった。特に、どの進路を選んだとしても、デュアルシステムによる教育を受けるチャンスはあり、具体的に、マティアス先生の学校を例に挙げ、様々な経歴を持った人がいる実例を話された。

②シュタイナー学校の歴史と教育内容について話された。シュタイナー学校出身であるミヒエール・エンデの作品「モモ」の中に登場する灰色の紳士と主人公の「モモ」とのやりとりの推移の中に、シュタイナーの教育観（実行力、感情、思考力）を見出し、カメのカシオペアは何の象徴かなど、大変考えさせられる内容であった。発達段階のどの段階にはどのような方法でどのような内容の教育をしていかなければならないのか、精神科学から見て子どもの教育を捉えることが大切であるといった内容であった。

③シュタイナー学校における美術の授業が実際に行われた。内容は、②で講演された内容の具体例で、同じテーマの絵であっても、「実行力」を育てる7歳までの子どもに教える方法、「感情」を育てる14歳までの子どもに教える方法、「思考力」を育てる21歳までの子どもに教える方法の3つの方法で実際の授業が行われた。それぞれ語り口まで異なり、日本の学校ではあまり見られない授業であった。



図2. 講演の様子
(ニノン・ケーテ・バーテルマン先生)



図3. 体験授業の様子



図1. 講演の様子
(マティアス・バーテルマン先生)

学外 FD 関連研修会参加レポート

平成25年度FD推進ワークショップ(新任専任教員向け)

「大学教員の職能開発とFD」

平成 25 年度 FD 推進ワークショップに参加して

■ ■ ■

藤澤 誠 (食環境科学部 准教授)

8月9日～8月10日に浜松で開催された日本私立大学連盟のFD推進ワークショップ(新任専任教員向け)に参加した。2日間にわたるワークショップの内容は、1日目のパネル・ディスカッションとグループ討議、2日目の模擬授業に分けられる。パネル・ディスカッションは、前年度のワークショップに参加した3名の先生方による体験談と質疑応答であった。最も記憶に残っているのは、『「知識」を「能力」に』というフレーズである。これまでの教育は知識を与え、学生が「知っている」ことを評価してきたが、現在は「何ができるか」、「何が言えるか」を評価することが重要になってきている。自分の講義を振り返ったとき、やはり、知識に大きく偏っていたように思う。

それでは、どのような授業を行えば、知識ではなく、能力を身に付けさせることができるのか。そのヒントは2日目の模擬授業とその事前準備にあった。事前準備ではワークシートを作成した。



1日目の懇親会の様子(一番左が著者)

ワークシートは「導入」、「展開」、「まとめ」の三段階について、それぞれ「教員の活動」、「学生の活動」、「留意点」をまとめるという内容であった。後で

見直すと、私の作成したワークシートは「教員の活動」ばかり書いてあり、「学生の活動」は「ノートに書き取る」くらいしか書いていなかった。学生が能動的に学習し、知識を



2日目の模擬授業の様子

活用する「能力」を身に付けるためには、この「学生の活動」を意識的に充実させる必要がある。

では、実際にどのような方法があるのだろうか。これについては、他大学の先生方の模擬授業が参考になった。1つ上げるとすれば、授業の途中で、「隣の人に1分間で説明してください。」というのは、有効かつすぐに使える方法だろう。また、本ワークショップで、もう1つ印象に残ったことは、建学の精神や教育理念に対する各科目の位置付けの説明の重要性である。建学の精神は大学によって異なるため、これをしっかりと明示し、当該科目が東洋大学のみで受講可能な特色のある科目であることを示せば、学生は東洋大学で学んだことに対して誇りと自信を持つことができ、普段の学習にも身が入るということである。今後の授業運営に是非取り入れていきたい。

「平成 25 年度 FD 推進ワークショップに参加して」

■ ■ ■

高橋 珠実 (食環境科学部 准教授)

とても緊張した2日間でしたが、他大学の先生方との意見交換は大変勉強になるものでした。模擬授業ワークシート作成では、限られた時間で授業案を作成しなければならず、とても大変でしたが、その短い時間でいかに授業を組み立てるか、いろいろな発見もありました。実際の模擬授業では、さまざまな分野の授業を受けることができ、とても新鮮に感じ、生徒役を楽しみました。授業方法については参考にできるものできないものと、分野によって差がありましたが、他の先生方の指導法を参考に、自分の指導法をどう改善していくべきかと考える機会になりました。また、自分の授業に対するコメントをいただくことで、改善すべき点や良い点をしっかりと確認することができました。特に、専門分野の内容を短時間で理解してもらうための工夫が不足していると気づけたことは大きな収穫でした。模擬授業は短い時間でしたが、自分の専門の分野の授業を行い、その内容について、そして指導法についての意見交換ができ、充実した時間を送ることができました。

ひとつ、課題として挙げさせていただくと、模擬授業後の意見交換では、どうしても授業内容の話が中心になってしまうので、授業者の指導法についての話を中心にするにはどう工夫すればいいのか、その点が課題だと感じました。

グループ討議、懇親会、昼食、模擬授業を通して、同じグループのメンバーとはすっかり打ちとけ、それぞれのメンバーの今後の授業の展開が楽しみになりました。これからも知り合った先生方と刺激し合い、そして情報交換を行っていきたくて考えています。今回の参加がきっかけで、新しい視点を持ちながら授業に臨むことができそうです。今回の緊張感を忘れず、よりよい授業作りへとつなげていきたい、そんな感想を持って後期の授業に臨みます。

2013 年度学生FDスタッフの活動・取り組みについて ～より学生が主体的に学び、行動する大学を目指して～

学生FDスタッフ 曾根 健吾（文学研究科教育学専攻博士前期課程）

2010年に始まった、本学での学生FD活動も本年度で4年目を迎えた。これまでは主に学生の授業への生の声を集め教職員へ発信する取り組みやニュースレター等での広報活動を展開し、FD推進センターの教職員の方々との連携を深めてきた。多くの大学で取られるようになった学生FD活動が転換期を迎えた今、2013年度は体制を一新して学内での活動を展開している。

2013年度は新たに学生FDスタッフを全学から公募し、現在文学部、社会学部、経済学部を中心に学部生、大学院生あわせて11名のスタッフで取り組みを進めている。今年度は活動の体制を見直し、活動の柱を「授業改善へ向けた取り組み」と「広報活動の展開」と定めて、運営・渉外を担当するワーキンググループ（以下、WG）と授業改善に取り組むWG、広報を担当するWGに分かれ、秋学期から質と実効性の高い取り組みを展開するべく学生FDスタッフが力を合わせて準備を進めている。具体的には、授業改善はこれまで



立命館大学学生FDサミット参加スタッフ

も取り組んできた、学生の授業に対する生の声を集め、その声を全学に発信するための「しゃべり場」の開催、授業への学生の声コンクール（仮称）の実施、学生の授業と学びに対する意識調査を行うために準備を進めている。広報活動は、学内での学生FD活動の

認知度向上をめざして、既にある学生FD活動のホームページリニューアル、掲示板を活用した広報などに取り組む予定である。その他、関東圏では東洋大学が学生FD活動に関わる情報交換、他大学交流の中心となっており、他大学との交流や企画参加、情報交換活動を通して、本学での活動の推進に活かすつもりである。

2014年3月8日、9日には全国で学生FD活動に取り組む学生、教職員が一同に集う「学生FDサミット」が本学白山キャンパスにて開催される予定である。本学のみなならず、他大学からも学生実行委員、教職員応援隊を募りサミットの企画、運営に当たるが、会場校である東洋大学の学生FD活動に今後益々注目が集まると思われる。現在は、教育の質保証を図るために学生FD活動の新たなモデル構築に向けても検討を進めている。今後は、新しく加入した学生FDスタッフの「やる気」をさらに活かして、スタッフ一丸となり引き続き教職員の方々と連携しながら、「学生の主体性あふれる大学」をめざして取り組みを進める予定である。皆様の声を取り組みに活かしたく、学生FD活動へのご意見、ご感想などありましたら遠慮なくお寄せいただければ幸いです。



ポスターセッションでの発表の様子
（立命館大学学生FDサミット）

バリアフリー推進室

～障がい学生支援～

柴田 可奈恵（学生生活課 課長補佐）

バリアフリー推進室は、障がい学生の修学及び学生生活等の支援を通じて修学環境の向上を目指す事を目的として、平成25年4月に白山キャンパス6号館1階に設置されました。

それと同時に本学における障がい学生支援は、平成9年7月から学生生活委員会のもと「東洋大学障害学生に関する小委員会規程」により身体に障がいのある学生に行われていた状況から、全学委員会体制での「東洋大学障がい学生支援委員会規程」による発達障がい等も含めた障がいのある学生の支援へと支援対象が広がりました。



ノートテイク講習会（6月）

バリアフリー推進室には、常駐者が専任職員（コーディネーター）1名、派遣（臨床心理士）1名。そして、毎週水曜日に学生相談員（臨床心理士）1名が配置され、スーパーバイザー（障がい関係専門教職員）1名は随時助言指導にあたっています。

7月末までの障がい学生相談実数は、視覚障がい3名、聴覚障がい6名、肢体不自由4名、発達障がい等が8名となりました。また、情報保障としてノートテイク・パソコンテイクを行う支援スタッフ登録者は、本学学生75名、外部者9名の計84名で、すでに昨年度を15名上回っています。



バリアフリーマップメンバー
オープンキャンパス反省会

す。来室者延べ人数は、4月450人、5月653人、6月531人、7月508人、春学期定期試験開始前までの平日来場者平均が約26人でした。来室が最も多いのは障がい学生を支援する健常学生で、ピアサポート（仲間同士の支え合い）が定着している状況が窺えますし、実際じっくり障がい学生と話し、楽しんでいる様子が見受けられます。

障がい学生は、バリアフリー推進室があることで自分が受け入れられていることを実感し安心感が生まれています。5月半ば頃からは、障がい学生と健常学生が一緒になりバリアフリーマップを作成するという自主的活動が見られるようになり、7月のオープンキャンパスではバリアフリーマップを掲示・配布し、障がいのある来場者の学内案内役をするまでになりました。

また、障がい学生にかかわる教職員との連携の場としても活用されています。特に、発達障がい等の学生対応は、専門家を含む教職員グループが慎重に、また随時連携を取り合って進めています。

バリアフリー推進室では、障がい学生の修学環境の向上および社会貢献の出来る学生の育成に努力してまいりますので、教職員のみならず一層のご協力をよろしくお願いいたします。



バリアフリーマップ
（オープンキャンパス掲示）



オープンキャンパスに向けたミーティング

教員の取組 Pick Up 「法学部 Friday English Lunch」

グリーン・H・スティーブン（法学部 准教授）

金曜日の午後。1号館の教室。日本人の学生と交換留学生 15 人ほどがおにぎりを食べながら、英語のボードゲームを囲んでいる。隣の机では身振り手振りも交えながらいろいろな話で盛り上がっている。使用言語は英語だ。Friday English Lunch の一場面である。

授業とは異なるアプローチで、英語を使えるようになる場を提供しようと 2011 年から始まったのが、法学部の Friday English Lunch である。

授業はどのような形であれ、シラバスに沿った指導を受けて、成績評価のための学習に取り組むという点で、教員主導的な学びの場になる。これに対して、Friday English Lunch の主役は学生だ。Friday English Lunch に参加すれば、英語で伝えたいこと、英語で理解したいことを学生が見つめることができる。ことばを使うための力を身につけるには、学生自身のなかに、ことばでコミュニケーションしたいという気持ちが生まれることが何よりも重要である。Friday English Lunch は、そのためのさまざまな「きっかけ」を用意している。

2011 年と 2012 年は、英語母語話者はネイティブスピーカー教員二人であった。東洋大学での生活とか未来の夢など、学生向けの話題について、自分で持って来た昼ご飯を食べながら、フリートーキングをした。

今年から、交換留学生 2 名がコーディネーターとして Friday English Lunch に加わっている。コーディネーターは法学部で採用する短期アルバイトとしての扱いだ。留学生は、専任教員の指導のもとに上記の活動を行なっている。彼らは学生と年齢が近いので、興味を共有したり考えに共感したりすることも多いはずである。学生と同世代の他国の人々がどのようなことを感じているかを知ることは、異文化の理解をより深めるのに役立つ。

Friday English Lunch は授業期間中週 1 回、昼休みから 3 限の時間帯を使って実施される。ネイティブスピーカーと最新時事ニュース、大学生生活、英語圏の国の文化等様々な話題について気軽にフリートーキングを楽しみながら、また、テーブルゲームや歌などあらかじめ準備された活動に取り組みながら、英語のコミュニケーション能力を伸ばそうとするものである。

さらに、Friday English Lunch の興味を喚起し、行事参加を促進するため、2 名のコーディネーターに週 1 回、メールマガジンのかたちで法学部生向けに英語のメッセージを発信してもらっている。今年のコーディネーター、バッドさん（米国出身）とケルシさん（米国出身）は、写真付きで、国の家族や日本での留学生生活など、毎週楽しいメッセージを書いてくれている。

Friday English Lunch に参加するための条件は「英語しか話さないこと」である。これはハードルが高いと感じる人もいるだろう。しかし、毎週 10 人から 20 人ほどの学生が熱心に参加している。金曜日の 12:30 ~ 14:30、あのにぎやかな教室を訪ねると、ハードルを飛び越える学生が見えるに違いない。



他大学との交流「関東圏 FD 連絡会」

第 12 回「関東圏 FD 連絡会」

日 時：2013 年 6 月 26 日（水） 15:30 ~ 17:30

場 所：東洋大学 白山キャンパス 東洋大学 125 記念ホール

参加者：青山学院大学、法政大学、立教大学、

東洋大学の FD 担当教職員 計 15 名

概 要：①各大学における FD 活動状況報告

②関東圏 FD 連絡会に関する包括協定書（案）について

③「学生 FD サミット 2014 春」について

平成 21 年度より青山学院大学、法政大学、立教大学、東洋大学の FD 担当教職員が集まり、同規模の私立大学が抱える FD 活動の問題解決と情報収集を目的とした意見交換会を開催しております。今後も各大学との連携を深めるとともに、東洋大学の FD 活動の改善・発展に努めて参ります。

全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) 加盟について

東洋大学は 2013 年 9 月より全国私立大学 FD 連携フォーラム (JPFF) へ加盟いたしました。このフォーラムは、学生の規模や多様性の面で共通の課題を抱える中規模以上の私立大学が互いに持てる力を出し合い、FD 分野において連携することを目的として 2008 年に発足し、本学を含め、全国の 29 校の大学が加盟しています。FD 活動のさらなる実質化のためには、他大学の事例やノウハウなどの情報収集や今以上の知識の蓄積と共有が必要であり、そのような意味で本フォーラムに参加することは大きな意義があると考えています。このフォーラムへ加盟したことにより、「実践的 FD プログラム」などに参加し、東洋大学における FD 活動の推進に役立てていきたいと思ひます。

平成25年度東洋大学FD推進センター活動報告 (平成25年4月～平成25年8月)

FD推進委員会

◆第1回

- 日 時：平成25年4月27日(土) 10:00～12:20
- 報告1 平成25年度ティーチング・アシスタント FD研修会について
- 審議1 平成25年度FD推進センターの活動方針について
- 審議2 部会の設置について
- 審議3 部会長の選出及び委員の各部会への配属について
- 審議4 平成25年度授業評価アンケートの実施について
- 審議5 その他
- 協議1 平成25年度FD推進センター活動スケジュールおよび委員会の運営について

◆第2回

- 日 時：平成25年5月25日(土) 10:00～12:00
- 報告1 各部会活動状況報告
- 報告2 センター長報告 ①平成25年度春学期授業評価アンケートの実施状況について
- 審議1 各部会活動計画
- 審議2 平成25年度新任教員FD研修会の開催プログラムについて
- 審議3 「教員研修のあり方と学生の学びに関する講演」の後援について
- 協議1 授業評価アンケートの教員へのフィードバック方法(情報提示)の改善について
- 協議2 「学生FDサミット2014春(仮)」の開催について

◆第3回

- 日 時：平成25年7月6日(土) 10:00～12:00
- 報告1 各部会活動状況報告
- 報告2 センター長報告
- ①平成25年度春学期授業評価アンケートの各教員への実施依頼について
- ②第12回関東FD連絡会報告
- ③「教員研修のあり方と学生の学びに関する講演」実施報告
- ④TOEIC指導者向けワークショップの開催について
- ⑤学長フォーラム「中期目標・中期計画プレゼンテーション」の開催について
- 審議1 教育改善シンポジウムの開催について
- 審議2 授業評価アンケートの教員へのフィードバック方法(情報提示)の改善について
- 審議3 平成25年度秋学期授業評価アンケートの実施スケジュールについて
- 審議4 全国私立大学FD連携フォーラムへの加盟について

研修部会

◆第1回(メール会議)

- 日 時：平成25年5月10日(金)～5月25日(土)
- 議題1 平成25年度 新任教員FD研修会開催について

教育改善対策部会

◆第1回

- 日 時：平成25年6月15日(土) 10:05～11:05
- 議題1 教育改善シンポジウムについて
- 議題2 平成25年度活動計画について
- 議題3 平成25年度学部FD活動状況報告会について

授業評価手法検討部会

◆第1回

- 日 時：平成25年6月29日(土) 10:00～12:00
- 議題1 平成25年度授業評価アンケート結果表(出力帳票)の改善点について
- 議題2 平成25年度秋学期授業評価アンケート実施要項について

編集部会

◆第1回

- 日 時：平成25年6月25日(土)～7月1日(月)
- 議題1 FDニュース第12号コンテンツ(案)について

学内公開活動

平成25年度TA(ティーチング・アシスタント)FD研修会

- 開催日時：平成25年4月20日(土) 13:00～15:00
(朝霞キャンパスのみ10:00～12:00)
- 会 場：白山キャンパス、川越キャンパス、板倉キャンパス、朝霞キャンパス
- 参加対象：平成25年度春学期採用のTA・SA
- 参加人数：約100名
(欠席者はワークシートに取組み、録画映像を視聴しアンケートに回答)

平成25年度新任教員FD研修会

- 開催日時：平成25年7月6日(土) 14:30～19:00
- 会 場：白山キャンパス 6号館6211教室
- 参加対象：平成25年度新任専任教員(非常勤講師は自由参加)
- 参加人数：約45名

東洋大学FD推進センター組織

